

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

***登録有形文化財に答申された国立天文台ゴーチェ子午環第二(北)子午線標室**

アーカイブ新聞第717号に「国立天文台ゴーチェ子午環第一(南)子午線標室」という記事を書いた。今回はその対をなしている「国立天文台ゴーチェ子午環第二(北)子午線標室」について書く。第二子午線標室(写真1)はゴーチェ子午環望遠鏡の不動点から北100mの位置に立っており、その南側には古くからの舗装されていない道路があり、第一子午線標室ほど人々に知られない存在ではなかった。しかし、子午線標室を覆う土盛りには篠竹、雑木が茂り、北側から見たのでは建築物とは見えない存在になっている。



実際にゴーチェ子午環が観測に供され始めたころには、この子午線標室と道路を挟んだ少し西側に子午線グループの研究室(辻研と呼ばれていた)の建物があり、その南30mほどのところには時計庫があった。これらの建物の痕跡は今でも竹藪の中に残っている。また、第二子午線標室の西側には平屋のブロック建ての実験室があり、赤羽先生を初めとする宇宙電波グループの研究が始められていた。本格的に6m宇宙電波望遠鏡の建設が始まり、新しい実験研究施設ができてからは、その建物は天文学会事務所として使われたが今は跡形もない。

この建物の南側の道路は、1984年に建設された自動光電子午環の観測領域に繋がっているため、厳しく通行を制限されていたこともあり、この第二子午線標室周辺は次第に真竹、雑木、篠竹などが生い茂った。これらの生い茂った真竹の竹林、第二子午線標室南側の篠

竹、雑木は「天文台の自然を守る会」の手で整備が進められており、今では以前の姿を知る者にとっては見違えるようにきれいになりつつある。

子午線標室は、第 717 号でも書いたが、小さな子午線票が置かれているだけの建物にしては結構大きな建物であり、その床面積が 17 平米ではあるが、東西に延びる壁面がゴーチェ子午環室に向かってデンと構えており、大きな建物に見える（写真 2）。



写真 2

アーカイブ室新聞（2009 年 1 月 6 日 第 110 号）に「ゴーチェ子午環子午線票室探検」



写真 3 天井にうじゃうじゃといる「かまどうま」

アーカイブ室新聞（2009 年 1 月 7 日 第 111 号）に「ゴーチェ子午環子午線票室探検」

(その2)」という記事が書いてある。この時は、第二子午線標室の探検であった。詳細はその記事を参照されたいが、長年人の入らなかった建物は、「カマドウマ」、「ヤモリ」の住処で中に入った途端、頭の上から「カマドウマ」の大群(写真3)が落ちてきて肝を冷やしたのであった。その際、子午線標のピアの上に壊れた子午線票を発見した(写真4)。



写真4 ゴーチェ子午環北子午線票

子午線票の載ったピアは、天文台の望遠鏡の入った建物に共通したようにピアは建物とは独立した構造になっており、地下から1階の天井を突き抜けて立っており、1階の天井、すなわち2階の床とは絶縁されており、1階部分には砂が敷き詰められていた(写真5)。



写真5 ゴーチェ子午環子午線票室1階から立ち上がったピア

子午線標室の建設時の図面は国立天文台に残っていなかったため、今回、登録有形文化財に申請するに当たっては、日本建築学会の手で実測図が作成された。図1が第二子午線標室の平面図、図2が立面図である。

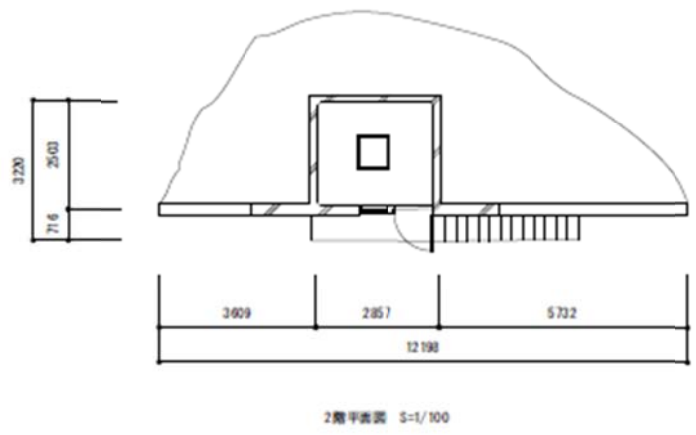
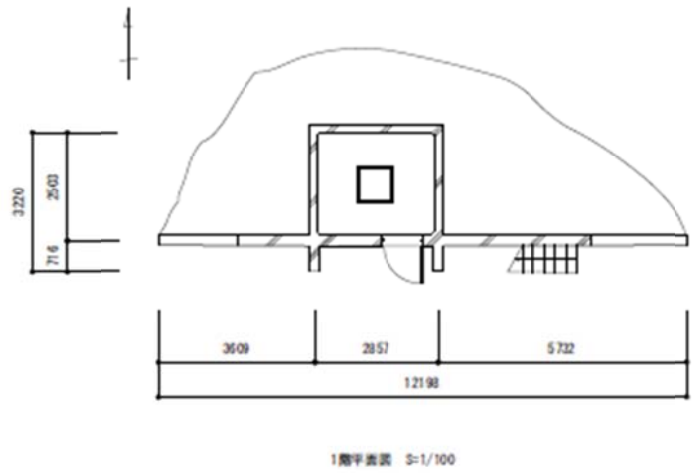


図1 平面図

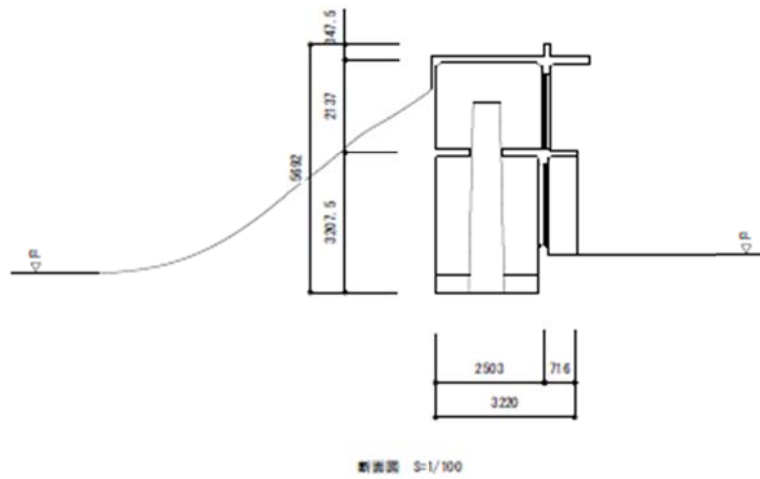


図2 立面図

図1、図2から分かるように子午線標室の裏側は土盛りで覆われており、ピアの温度変化を抑える工夫がなされている。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp